

埼玉県弓道の歴史

- 1 埼玉県の弓道 ……歴史の流れに沿って……
 - (1) 鎌倉・南北朝時代
 - (2) 室町・戦国時代
 - (3) 江戸時代 (忍藩、川越藩、岩槻藩)
 - (4) 明治・大正時代 (全国の組織化)
 - (5) 昭和・平成時代 (埼玉県弓道連合会・埼玉県弓友会・埼玉県弓道連盟)
- 2 埼玉県弓道連盟創立50周年記念
- 3 創立50年を超えて (纏まり次第掲載します)
- 4 支部の紹介 (秩父、県北、東部、県南、県央、西部、中部)
- 5 編集後記

1 埼玉県の弓道 ……歴史の流れに沿って……

(1) 鎌倉・南北朝時代

源頼朝が鎌倉に入り幕府を開いて以来毎年正月の行事の一つとして「弓始め」を行っている。弓始めについては吾妻鏡にも記載されているが、これら記録が武家故実家の小笠原氏流によって『御的日記』として編纂されたものが残されており現在内閣文庫蔵として保存されている。弓始めは正月15日前後に將軍の臨席のもとに行われた射会で、いかなる基準をもって射手を選出したかは不明であるが、その成績からすると出場者はこぞって弓の達人であったようだ。この中には武蔵国の人物が多く出ていることから、『新編埼玉県史資料編7 中世3 記録1』として載せてあり、鎌倉時代の治承四年(1180)から南北朝時代の永和二年(1376)までの196年間の記録が記載されている。これをもとに現在までに出身地の分かっている人物については埼玉県内の各市町村史に記載されており、本ホームページを作成するに当たり調査し、判明した人物を挙げると次のようになる。

氏名	出場年	出典
下河邊莊司行平	治承4年(1180)10月20日 以後5回	春日部市史、八潮町史 杉戸町史、他
真板五郎次郎経朝	仁治4年(1243)正月10日 以後6回	川里村史
多賀谷彌五郎重茂	建長3年(1251)正月10日 以後4回	騎西町史
栢間左衛門次郎季忠	文應元年(1260)正月14日 以後1回	菖蒲町史
栢間左衛門二郎行泰	文永3年(1266)正月11日	菖蒲町史
勅使河原新左衛門重直	永仁3年(1295)正月14日 以後2回	児玉市史
野邊孫太郎	正安2年(1300)正月12日	児玉市史
勅使河原後四郎武直	正和2年(1313)正月15日 以後8回	児玉市史
金子十郎忠基	正和2年(1313)正月15日 以後4回	児玉市史
浅羽左衛門三郎俊光	正和4年(1315)正月15日 以後3回	児玉市史

久下彦次郎宗貞	文保3年(1319)正月9日	児玉市史
多賀谷弥平次光忠	嘉暦3年(1328)5月9日	騎西町史
建戸彦三郎為重	嘉暦3年(1328)5月9日 以後1回	川里村史
金子十郎家基	建武2年(1335)正月7日	児玉市史

下河邊莊司行平は広大な莊園を有し、源頼朝が武蔵国に入った当初から頼朝に寄しており、頼朝の信頼篤く弓の達人であったことから、頼朝の嫡子頼家が9歳になると行平が弓術の指南役を頼朝から直接命じられたことが吾妻鏡の建久元年(1190)4月7日に記載されている。

(2) 室町・戦国時代

室町時代の関東の情勢は鎌倉府においては古河公方と堀越公方の抗争、関東管領においては山内上杉(やまのうちうえずぎ)と扇谷上杉(おうぎがやつうえずぎ)の抗争が起こり、これら二つが複雑に絡み合い、中小武将もそれぞれの利害によって離合を繰り返し戦火が絶えなかった。そうした隙をついて伊豆の伊勢早雲が小田原城を乗っ取り、更に武蔵国へと勢力を伸ばしていった。早雲の子、氏綱は北條を名乗り、父早雲の意思を継いで江戸城、川越城、滝山城を攻め落とした。三代目氏康は松山城、鉢形城、岩槻城などを手中に治め、四代氏政、五代氏直の時には下総、上野を攻め、ほぼ関東を征圧した。五代百年にわたる関東制覇の間、北條は上杉との攻防戦、武田との攻防戦など熾烈な戦いが続いた。

更に豊臣秀吉の小田原攻めにおいても武蔵国での戦が多くあり、現在の埼玉県下は室町時代から戦国時代にかけては兵火が絶えなかった。

こうしたことから、この時代の弓術にたいする記録、古文書なども兵火に遭い焼失したものだと思われ、殆ど見当たらない。

(3) 江戸時代

江戸時代になると政情も安定し、泰平な時代となり幕府も文武を奨励した。各藩士の精神面の養成として武術が盛んとなってくる。弓術においては特に忍藩(行田市)、川越藩(川越市)、岩槻藩(さいたま市岩槻区)が盛んであったようだ。忍城は成田氏、川越城は北條氏康の城代大導寺氏、岩槻城は太田氏の居城であったが秀吉の小田原攻めに伴い天正18年(1590)にことごとく落城し、関東は徳川家康の所領となって、幕府成立後は三藩とも徳川譜代家臣によって治められた。これら三藩に共通していえることは藩主が武術を奨励し、良き指南役を求め得たことによるものと思われる。

江戸三十三間堂が寛永19年(1642)に江戸浅草に設立され、以後京都三十三間堂に出場した者は京都三十三間堂矢数帳によると忍藩の明暦2年(1656)海野仁左衛門、享保17年(1732)海野伝治、元文2年(1739)竹中惣蔵の3名しか見当たらない。江戸浅草三十三間堂は元禄11年(1698)9月に江戸大火に見舞われ類焼し、翌年元禄12年(1699)5月に深川に新三十三間堂が再建されている。

尚、矢数帳の記録は京都三十三間堂が文久元年(1861)まで、江戸三十三間堂は慶応2年(1886)までの記録が残っている。

◇ 忍藩

忍藩においては藩主阿部家時代に指南役として日置流道雪派海野仁左衛門景光と日置流印西派宮崎射太夫を併存し両者に350石を給していた。海野家においては景光、景久、景達、景壽と四代に亘り指南役を務め何れも仁左衛門を名乗った。

藩主	出場年	出場者	指南役	摘要
安部忠秋 寛永16年～文政6年 (1639～1671)	正保2年(1645)	海野仁左衛門		江戸浅草
	明暦2年(1656)	海野仁左衛門		京都
	寛文6年(1666)	宮崎大学		江戸浅草
安部正武 延宝5年～宝永元年 (1677～1704)	延宝9年(1681)	海野縫殿右衛門	海野仁左衛門	江戸浅草
	貞京元年(1684)	宮崎矢一郎	宮崎射太夫	江戸浅草
	貞京3年(1686)	宮崎矢一郎 鈴木新左衛門	宮崎射太夫	江戸浅草
	元禄6年(1695)	宮崎八十右衛門 吉住郡司右衛門	宮崎射太夫	江戸浅草
安部正喬 宝永元年～寛延元年 (1704～1748)	宝永7年(1710)	海野縫殿右衛門 野矢六左衛門	海野仁左衛門	江戸深川
	享保6年(1721)	酒井幸大夫	塩見孫左衛門	江戸深川
	享保17年(1732)	海野伝治	海野仁左衛門	京都
	元文2年(1739)	竹中惣蔵	海野仁左衛門	京都
安部正允 寛延元年～安永9年 (1748～1780)	宝暦3年(1753)	平岩団之助 湯川徳次郎	海野仁左衛門	江戸深川
	宝暦6年(1756)	瀬下治兵衛	海野仁左衛門	江戸深川
	宝暦9年(1759)	湯川源治	竹中惣治	江戸深川
安部正権 文化5年～文政6年 (1808～1823)	文化8年(1811)	松林沂八郎	海野仁左衛門	江戸深川
	文化13年(1816)	酒井雲平	海野仁左衛門	江戸深川
	文化14年(1817)	野矢磯五郎	父矢島之助	江戸深川

◇ 川越藩

家康は三河以来の重臣酒井重忠を川越藩の藩主に据えた。以後、明治4年(1871)廃藩置県にいたるまで川越藩は8家21代の藩主によって治められた。藩主によっては良き指南役を得弓術を奨励したようである。その一例として柳沢吉保(元禄7年～宝永元年 1694～1704)のとき日置流竹林派米田知益が家臣におり、知益は多くの門人を育てた。その中の一人に岩槻藩主大岡忠光がいる。また、日置流道雪派弓術の本流の家系で、石井友之進利豊が初代として、後6代に亘り代々友之進を名乗り、川越藩の指南役を務めた。第6代目石井友之進利長は川越藩最後の指南役で維新後利常と改名し、明治2年免許を受け、明治4年印可皆伝、後に大日本武徳会埼玉支部の第2代師範となった。大正元年には大日本武徳会より精錬証を授与されている。

藩主	出場年	出場者	指南役	摘要
秋元喬知 宝永元年～明和4年 (1704～1767)	享保2年(1717)	宮原助右衛門	河野一左衛門	江戸深川
	享保4年(1719)	宮原市兵衛	父宮原助右衛門	江戸深川
	享保6年(1721)	宮原貫太 古田平次	宮原市兵衛	江戸深川
松平直温 文化7年～文化13年 (1810～1816)	文化9年(1812)	大熊健治	一色佐平太	江戸深川

◇ 岩槻藩

岩槻藩は高力清長を初代藩主（天正18年～慶長5年、1590～1600）として9家25代に亘って治められた。特に大岡家においては大岡家初代大岡忠光（宝暦6年～10年、1756～1760）から明治4年廃藩置県にいたる大岡家8代藩主大岡忠貫（慶応2年～明治4年、1866～1871）まで115年間に亘って藩主となって、歴代藩主の中で領民には最も親しみ深い藩主となった。阿部家の時代は吉田助左衛門（豊隆）をはじめとして4名の者が京都三十三間堂通し矢に名を連ねるなど良き藩主、良き指南役を得て岩槻藩の弓術は第一次黄金期をむかえた。下がって大岡時代には藩主自ら弓術を修練し、さらに藩校遷喬館や武芸稽古場の設置により、文武の振興に尽力し、また、江戸三十三間堂通し矢にも出場するなど第二次黄金期であったようだ。

藩主	出場年	出場者	指南役	摘要
阿部正次 元和9年～寛永15年 (1623～1638)	寛永5年(1628)	吉田助左衛門	佐久間四郎左衛門	京都
	寛永6年(1629)	吉田助左衛門 下宮佐助 田村源兵衛	佐久間四郎左衛門	京都
	寛永7年(1630)	下宮才三郎	吉田助左衛門	京都
	寛永8年(1631)	下宮才三郎	吉田助左衛門	京都
大岡忠固 文化15年～嘉永5年 (1816～1852)	弘化3年(1846)	岩上友之助	池宮市太郎	江戸深川

(4) 明治・大正時代（全国の組織化）

江戸時代の末期に徳川慶喜によって慶応3年(1867)大政奉還がなされ明治時代にはいると明治新政府(1868)は明治4年(1871)廃藩置県を断行し、多くの武士が失業することになる。明治9年(1876)には廃刀令が布告され、維新になると武道はすっかり衰退の憂き目にあい、弓術においては遊行を目的とする矢場すら出現し、的に中ると金品を出したり、賭け弓をする者すら現れるようになった。

しかし、明治中期になると本来の武道を志す人達が立ち上り、維新以来衰退している武道を再興し、国民の士気涵養を図る気運が高まり弓道、剣道、柔道および各種武道を総合し

た全国組織である「大日本武徳会」を明治28年(1895)に発足させた。

埼玉県においては大日本武徳会埼玉県支部が明治45年4月23日に浦和市高砂(現県庁舎敷地内)に武徳殿を建設し、2日後の25日に武徳殿に隣接する弓道場において初代師範湯本半兵衛が矢渡しを行う。しかし、弓道においては明治期埼玉県としての県組織は確立されていない。大正6年7月大日本弓道会所沢支部が設立され、埼玉県においてはこれを契機に各地に大日本弓道会支部が設立されるようになった。

(5) 昭和・平成時代 (埼玉県弓道連合会・埼玉県弓友会・埼玉県弓道連盟)

埼玉県においては大正の中期から昭和の初期にかけて地方において大日本弓道会支部が設立された。そのような状況下にあつて、当時の浦和市長 阿佐見新作, 県会議員 倉林周助、範士 高木?などが中心となり昭和4年10月埼玉県弓道連合会を設立する。これが現埼玉県弓道連盟の基礎となっている。

NO	設立年月日	支部名
1	大正6年7月10日	大日本弓道会所沢支部
2	大正10年6月2日	大日本弓道会草加支部
3	大正14年4月7日	大日本弓道会熊谷支部
4	大正15年4月1日	大日本弓道会入間川支部
5	昭和2年7月17日	大日本弓道会飯能支部
6	昭和5年4月3日	大日本弓道会本庄支部
7	昭和11年8月28日	大日本弓道会深谷支部

昭和6年10月それまで仮設であつた弓道場が武徳殿弓道場として同じ場所に新設された。これを機会に埼玉県弓道連合会としての行事も行われるようになった。

昭和15年には宮内省主催、紀元2600年記念奉祝昭和天覧試合(皇居内済寧館弓道場)において中島義人教士7段(入間市)が府県選手として出場し準優勝を果たした。同年5月6日には紀元2600年奉祝大演武(京都武徳殿)において森戸康之が錬士団の部で優勝した。そして同年11月2日に行われた紀元2600年奉祝明治神宮体育大会一般女子の部において団体優勝(石川タマ、海野静子、桑原千代)をし、埼玉県弓道連合会としては紀元2600年奉祝行事においてはめざましい活躍を残している。

昭和16年12月8日大東亜戦争が勃発し戦時色が高まる中、政府は厚生、文部、陸軍、海軍、内務の5省共管のもと、極めて国粹主義的性格を鮮明にし、内閣総理大臣を会長に据えた「大日本武徳会」を昭和17年4月に政府外郭団体として新たに発足させた。これがもとで終戦後、連合軍は政府が干渉した武道を排除するよう命じ、時の内務大臣によって「大日本武徳会」は昭和21年11月9日に解散させられた。

その後、埼玉においては高木斐氏が主唱者となり熊谷市の松本磯吉氏などと再三の会合を持ち埼玉弓友連盟を昭和21年に発足させ秩父、入間川越、県南、西部の4支部を置いた。

全国的には終戦後の混乱の中、弓道界の要人が結集し昭和24年5月24日に「日本弓道連盟」を創立させ、昭和28年9月15日「財団法人日本弓道連盟」設立が許可される。そ

の後、昭和32年1月15日に「財団法人全日本弓道連盟」と名称が改められ現在に至っている。

埼玉県においては「日本弓道連盟」が創立した同年の昭和24年11月3日に埼玉弓友連盟が発展的解散をし「埼玉県弓道連盟」を創立させている。創立当初の審査、競技などの行事は熊谷市の松本道場、長瀬町の宝登山神社弓道場、浦和市の森戸道場など個人所有の道場において実施されていたが、昭和29年7月に大宮公園県営弓道場が創設されてからは主なる行事は次第に大宮公園県営弓道場で行われるようになっていった。

昭和28年8月1日に財団法人日本弓道連盟より弓道教本第一巻が発行され、この教本内容を普及するための埼玉県弓道連盟主催の教本講習会が、昭和30年9月19日に大宮公園県営弓道場で行われた。昭和42年10月に第22回国民体育大会が埼玉県で開催され、弓道競技会場として秩父市が昭和41年5月秩父市営第一弓道場(12人立)を落成し、昭和43年12月浦和に埼玉県立武道館弓道場(5人立)が落成、昭和55年4月には大宮公園県営弓道場(12人立)を現在の場所に立替、平成に入って、平成3年8月には熊谷運動公園弓道場(10人立)、平成5年4月には所沢市民武道館(10人立)、平成14年4月には平成16年10月に開催された第59回国民大会弓道競技会場となった日高市文化体育館弓道場(10人立)が落成し、次いで翌年の平成15年7月には上尾市に埼玉県立武道館弓道場(12人立)が落成した。この県立武道館弓道場ができた事により、浦和にあった県立武道館弓道場は取り壊される事になった。現在はこれら大型弓道場が埼玉県弓道連盟の主催する講習会、審査会、競技会などの会場となっている。

埼玉県弓道連盟創立当時は4支部を擁していたが、県内の弓道人口が増大すると共に支部分割が進み現在では7支部となっている。各支部とも昭和50年代から平成5年頃まで公営の弓道場が創設され、埼玉県の弓道人口もそれに連れて増加してきたがここに来て少子化の影響か、高校生の弓道人口が平成7年(2,940名)をピークに減少しており、一般会員の数は増えているものの全体としてはやや減少傾向が見えている。

弓 道 人 口 平成20年1月1日現在

年度	道場数	中学生	高校生	大学生	一般	合計
平成元年	56	289	2,910	242	2,000	5,441
平成5年	60	114	2,449	328	2,627	5,518
平成11年	*	12	1,803	220	2,451	4,486
平成15年	72	67	2,657	199	2,658	5,581
平成20年	71	47	1,341	158	3,077	4,623

2 埼玉県弓道連盟創立50周年記念

昭和24年、日本弓道連盟(全日本弓道連盟)が創立されると同時に埼玉県弓道連盟もこの傘下に加盟してから、平成11年で創立50周年を迎えた。これを機に、記念事業として記念誌の発行及び記念行事開催のための委員会を発足させ、平成11年11月28日(日)県立大宮公園弓道場において記念式典及び祝射会、次いで隣接する大宮国体記念会館にて記念祝賀会を行った。

記念式典は出席者359名を得て、埼玉県弓道連盟松沢岳会長（当時）の挨拶、ご来賓の祝辞に続いて功労者等に表彰状及び感謝状の贈呈等が行われ、次いで代表者による祝射会を開催した。

その後、ご来賓、招待者を始め50周年記念行事役員、県連役員、各支部の会員代表など総勢189名の出席者で祝賀会が盛大に執り行われた。

なお後日、多くの会員に参加をしていただく趣旨で支部ごとに記念の冠射会を開催し、総勢で2,760名がこれに参加した。

これら50周年記念行事の記録を含め、「埼玉県弓道連盟創立五十周年記念誌」が翌平成12年3月31日に発行され、記念行事を締め括った。

3 創立50年を超えて

（ 50周年以降現在までのエポックを記載 作成中 ）

4 支部の紹介

◇ 秩父支部の特色

秩父支部は埼玉県北西部に位置し、関東平野の一角ではあるが周りを山に囲まれた秩父盆地の中にあり、これが県内他支部に比し大きなハンディである。

昔は地元の生糸を使った秩父銘仙、武甲山に埋蔵されている石灰石を使ったセメント産業、秩父の清浄な空気を利用して作る窒素など自然と共生する産業で賑わっていた。また全国から生糸や、銘仙を求める業者が集まって賑わう師走の市として秩父神社夜祭も盛大に行われて来た。しかしその後の経済変動によりこれらの産業は衰退の一途を辿り現在に至って居り、弓道界をある意味で支えてきた柱がなくなったのも事実である。

弓道は先の生糸生産を中心とした農村部では、余興として賭け弓などが一般の人の中で盛んに行われていた。それと同時に本格的な弓道として秩父の生糸産業に携わる人やその他の富裕層の間で盛んに行われており、戦前においても阿波研造先生、大平善三先生を始め、高名な先生方を招き修練を重ねた。同時に弓具も良いものを求める人が多く、弓具商も頻繁に足を運んでいた。

第二次世界大戦終戦と共にGHQの武道禁止令により一時中止されたが、昭和22年禁止令が解かれるとすぐに先の先人たちが再開し、その後の弓道発展に力を注いだ。昭和25年には、宝登山神社に秩父鉄道、秩父セメント、織物組合等の力添えで間口6間しかも隣には野天であるが遠的射場を備えた素晴らしい道場が出来、関東大会と銘打って毎年春秋2回大会を開催し、道場の少なかった時代でも在り、東京や群馬からも参加者を得て盛大に開催され、戦後の弓道復興に大いに役立った。またいち早く弓道を再開した人たちが新しい時代の弓道を牽引すると共に、窪田真太郎範士、村上久範士、安沢平次郎範士など多くの先生をお招きし、また現在埼弓連会長の尊父小澤武雄範士のような立派な指導者を得て秩父の弓界を指導してきた。これらの甲斐あって弓道人口も増え、多くの企業の中に弓道部も出来、多くの高段者を輩出し秩父の弓道界の最盛期を迎えたのである。この様にいち早く有力者の手で弓道が復活された関係もあり、埼玉県内でも有力な支部となって行った。その後大宮に県営道場

が建てられ埼玉県弓道の中心となり大いに活用されたが、当時は大宮周辺の弓道人口も少なく、秩父の人が行って道場を管理するような状態にあった。そして昭和33年から始った秩父神社奉納県下武道大会は当時の秩父セメント(株)の後援で、県内各地からの参加者を得て、盛大に行われ、昨年には第50回記念大会も開催された。さらにスポーツの最大イベントである昭和42年国民体育大会弓道の部も、現在の秩父第一中学校内に当時としては東日本一という秩父市営道場が建設され、開催されたのである。このように戦後の弓道復興に大きな力を発揮した秩父支部であるが、その後織物産業、セメント産業の衰退で企業と弓道の関係は次第に薄れ、戦後の弓道を牽引されてきた原島孝造氏、島田豊三郎氏、小澤武雄氏、近藤友三氏、引間潔氏他の戦前、戦中、戦後の弓道を支えて来た方々も亡くなり、大きく様変わりすると共に、ご多分に漏れず、過疎化が進み、弓道人は少なくなり、高齢化が一段と進んでしまった。

しかしその反面他支部には見られないことだが、秩父の総人口12万人弱に対し、弓道場は秩父市営の10人立ち三人立ちの二つの道場を始め皆野町、小鹿野町に五人立ちの公営道場があり、企業内道場が横瀬町三菱セメント内に、さらに小澤道場、交心道場、静仙洞ユアアイ弓道場と三箇所の個人道場、弓道場を併設している民宿が2施設と練習道場には非常に恵まれている。また秩父郡市内の各高校はそれぞれ弓道場を有し、それぞれの道場が競って稽古を重ねている。そして年間6回の支部内の中学、高校、一般の弓道人が一堂に集い支部カップ戦も行われているし、高校の5校対抗射会も二度行われている。このように少ない人数では在るがそれぞれの道場の特色を生かした支部運営および指導が行われている。

秩父支部の現状を示す二つの話が秩父の弓道界の実態であることを紹介しておく。

一つは県下武道大会弓道の部の趣旨であるが、当初は青少年育成のためというスローガンが前面に出ていたが、その後一般参加者の高齢化が進み、多くなって来た事から生涯スポーツとしての弓道ということが大きな分野を占めてきた。勿論青少年育成の基本は変わらず中学生、高校生の多数の参加を得て、その役割を果たしている。

もう一つは10年位前の事だが、当時の埼弓連会長松沢岳先生が「秩父は初段を受ける人が少ないんだよな。」と独り言のようにつぶやいた言葉で象徴されるように、他支部と異なり新たに弓道始める人が非常に少ないことが、最も切実な問題となっており、弓道人口の減少と、容易には改善されない現状である。勿論弓道始める比較的高年令の方が多ことは、年令に関わり無く出来るスポーツとしての特色が生かされて良いことである。只高校や、大学時代弓道に関わった人が、地元企業が少ないため都市部に流れてしまい、秩父の弓道界に入ってこない現状からして、弓道を始めた人を如何に興味を持たせ、育てて行くかが現在の弓道人に課せられた大きな責務だと思われる。

◇ 県北支部の歴史

県北支部の所在位置は旧中仙道の宿場町を通り、その周辺の町を取り込んでいます。(鴻巣近辺より本庄近辺まで)

深谷での弓道の始まりは町の造酒家の旦那の遊びから道場が出来、射よりも弓・矢などの弓具を自慢しあっていたようです。また中華料理屋さんの隠居さんが道場を建て楽しく弓を

引いていたようです。射法などはどのようなようであったかは分かりません。また深谷の中心にある商店の旦那たちが羽振りの良かったときに氏神様の神社の境内に弓道場を造り奉納してここでも楽しく弓を引いていたようです。冬でも朝早くからあつまり、炬燵に入り、お茶を飲んで世間話をして、それで終わり、とか。今では、どちらの弓道場も閉鎖したり、区画整理で立ち退きになりありませんが、ひとつはビッグタートル弓道場に、ひとつは稲荷神社で射楽会として続いています。稲荷神社の道場は道路が出来るので閉鎖になるとき会員の方がお金を出しあって、労働奉仕もして、出来た道場です。三人立ちの小さな道場です。ほかの道場でも同じように道路ができたり、公共の建物が出来るので、移転したりと、街中から郊外にと移転しているのではないのでしょうか。移転を繰り返しながらも長い間弓道場が無くなることもなく続けてこられたのも、先人の熱い想いがあったからだと思います。昔の道場の練習方法や管理運営や組織も随分と変わったでしょうが、新しい時代に即した方法でますます弓道が盛んになっていって欲しいものです。がどこでも同じ悩みと言えれば小さな道場では新入会員が入って来ないということではないのでしょうか。

県北の道場では熊谷運動公園弓道場が遠的射場もある大きな道場です。支部の大きな射会はここで行います。会員が「くまきゅうたんぼう」という情報誌を年二回発行しています。

支部では11の道場があり、会員が日々練習に励んでおります。各道場の歴史は埼玉県弓道連盟の「五十周年記念誌」に詳しく載っておりますので、そちらをご覧ください。

県北支部で誇れるもの、それは錬望会です。これも先人が称号者を増やそうとして創られた会で、五段の人達が錬士を目指して月一度集まり審査を目標に練習をする会です。

それぞれの道場の中だけでは審査方式の練習も出来ず。また小さい道場では入退場の体配も出来ないこともあります。熊谷道場で大勢の向上心に燃えている人達が練習に励んでいます。目出度く錬士に昇格しますと、名誉会員となり、いつまでも会に残ってられ、仲間と楽しいお酒も飲めるという特典もあります。錬士になりますと、次には錬士会に入会して六段、教士を目指すことも出来ます。先生や多くの先輩からの指導を仰ぎ斯道に励んでいます。

高校生大会は17高校対抗で年二度行います(八月200名程、三月270名程)、いつも男子より、女子が多く、弓道は女子に人気があるとおもわれます。八月の射会には一年生の新入部員が多く参加して、射法も体配も安定してきて一人前の弓児としての一步を踏み出すことになります。これからの弓道を背負っていく人達であることが頼もしく見受けられます。ただ高校生は卒業しますと、就職、進学等と地元をはなれるため、弓道も辞めてしまう人が多いのは残念な事です。

ですが弓道教室の受講者の大半が弓道の経験者(期間の長い短いはありません)であるということは何年か後、何十年か後には帰ってきて仲間になる、まるで海亀が大きくなって生まれ故郷に帰って来るように、楽しみにして待つのも面白いのではないのでしょうか？

支部講習会、親睦研修旅行と歴史ある支部行事を受け継いでいく事も今弓を引いている私たちの大事な事だと思います。

【出席者】

初 代支部長 細沼 昇教士七段 (昭和62年～平成12年)

二代目支部長 勅使川原隆教士六段 (平成13年～平成16年)

三代目支部長 根本武次郎教士六段 (平成17年～)

[司会]

この度、ホームページに東部支部の歴史・特色を紹介することとなりました。以前は県南支部に所属していたわけですが、東部地区の発展に伴い弓道人口が著しく増加した為、昭和62年に分割し、東部支部が発足したと50年史に記録されています。当時の事を含めお話をお聞きかせください。

[質問] 支部長となられた時の様子と決意、所属連盟を教えてください。

細沼 称号者が少ない支部だったが、県南支部副支部長を6年経験したことで、県の先生方とのつながりがあり、支部長としての道筋が出来て行事を滞りなくこなせたような気がします。当時は大宮、岩槻、吉川、桶川、春日部、北本、越谷、杉戸、蓮田、松伏、10地区7道場だった。平成8年頃には北本体育センター、久喜、幸手、宮代、上尾と15連盟15道場となりました。

勅使川原 決意というものではありませんでしたが大宮武道館で解散式をしました。分かれた連盟が余りにも大きい存在で、残った連盟の役割分担が大変でした。特に審査関係は今までは細沼先生が一手に引き受けておられたので軌道に乗るまでは締め切り日は遠慮なく来るし、苦勞をしました。解決策としては地方審査と連合審査と中央審査の担当を決めたりし、分担することにより役割に意識を持つ事が出来ました。当時の連盟は岩槻、桶川、春日部、北本直心館、北本弓友会、久喜、幸手、杉戸、蓮田、宮代10連盟でした。

根本 特に先立っての決意ということではありませんが、支部長は県連からの情報を支部会員に伝達をする役目だと今も思っています。連盟は8連盟、上尾、桶川、春日部、北本、久喜、幸手、杉戸、宮代。2大学、日本工業大学、共栄大学それに11高等学校が所属しています。

[質問] 特に心がけてこられたことは・・・。

細沼 県連との橋渡しを確実にすることに心掛けた。これも支部内の協力があって救われました。

勅使川原 気遣いと言うか、矢渡などで介添えをしてくれた人にお礼のはがきを出したり、それと昇格した人には称号者名簿に太字で名前を入れてお祝いとしました。もらった人はどう思ったか分かりませんが自分の気持としました。

[質問] 大会や講習会は如何でしたか・・・。

細沼・勅使川原 各道場を順番に巡り開催していました。ですからその道場の様子がよく分かりました。準備等で道場なりの特色があり、今と比較すると主催者側も参加者側も大会に臨む心構えが違っていた様に思います。

根本 今は支部行事として①東部選手権&県体予選、②道場対抗戦&武道大会予選、③納射会、④初射会、⑤総会射会、計5回の大会と総会、高校生関係の大会を3回開催していま

す。講習会は（高校生含む）計7回計画しています。又、当初は称号者も少なく大会、審査等の手伝いなど経験者も少ないことで支部の行事に指導部、競技部対象の研修会を計画し実際に大会を想定して進行、的前の役割、介添の失の処理、矢の受け渡し等を学んだりしています。

[質問] 今後の運営方針をお聞かせください。

根本 今では称号者も33名になりました。（平成20年1月現在）指導者としての修練に力を入れると共に会員の増加に努めたいと思っています。

[質問] 冠射会について一言お願い致します。

根本 春日部市の市花にちなんだ『ふじ祭り射会』はすでに第1回を開催してから16年となりますが、参加者はいつも250名くらいとなり「明るさと楽しさ」をモットーに絵的を射抜くお祭りの射会としています。平成17年から『宮代町近隣射会』を行っています。80名程度の参加者で規模は小さいですが、色的で点数制で競いますから予想つかない意外な結果が待ち受けており最後まで気が抜けない親睦射会です。

[司会] ここに紹介できましたことは歴代支部長のご苦労されましたごく一部のことと思います。今後とも、支部のためにご指導をお願いいたします。ありがとうございました。

◇ 県南支部の歴史 (昭和24年～平成20年)

昭和24年埼玉県弓道連盟創立に伴い、県内は4支部の構成となり当県南支部もその1支部として発足した。その区域は現在の県央支部と東部支部そして県南支部を併せた広範囲であったが、会員数は数十名と今から考えると極く少人数であった。

当時の道場としては、浦和に円蔵寺境内の仮設道場、北浦和東口の仮道場から西口に本格的道場として建設された森戸道場、大宮に大宮工機内道場と須永道場があった。

特に森戸範士夫妻の全国レベルでの活躍は目覚ましいものがあり、先生を筆頭に支部の発展が図られた。森戸道場においては、県連関係の研修会や各種射会、段級審査も度々行われた。

その後、小島隆蔵県連会長をはじめ歴代支部長の渡辺直、斉藤鶴蔵、小島常男、中山正統等の諸先生の献身的な努力により、大宮公園弓道場に続いて昭和33年に浦和市営弓道場、昭和39年に川口青木公園弓道場と地域的に道場の建設が進んだ。また、各地区の弓道連盟が発足し、弓道場も昭和43年県立武道館、昭和49年に浦和市体育館弓道場の創設、大宮公園弓道場の改築等があり、益々支部の基礎が確立された。伊沢範士を迎えて技術の向上に積極的に取り組み、選手の育成にも努め、徐々に会員数も増加の一途をたどった。また、勤労者部門においてもサッポロビール、日本車輛、新潟鐵工所、金方堂の各チーム等が支部に参加し会員増加の一役を担った。その中で金方堂チームは全国制覇を果たすという活躍があった。

昭和62年には会員の増加に伴い、県連の指示により県南支部が2分割され、県南支部と東部支部とに分かれた。県南支部は与野市、浦和市、川口市、蕨市、戸田市、草加市の6市が所属することとなり、支部長は大原草結の下に再発足することとなった。各連盟共に徐々に会員数を増やし充実を図ってきたが、残念ながら勤労者部門は衰退し、現在では消滅状態となっている。その後、支部長は現県連副会長の新井勲夫に引き継がれ、特に池田邦子、小

宮栄子両範士及び各支部諸先生方の積極的な努力により女子会員の飛躍的増加には目を見張るものがあり、現在では男女同数にとせまっている。

平成13年の県央支部の誕生により、与野市、浦和市、が県央支部に、東部支部より越谷市、吉川市、松伏町が県南支部に編入され川口市、蕨市、戸田市、草加市の6市1町（八潮市、三郷市は弓連がない）が現県南支部を構成している。この時、県連会長が松沢岳会長から現小澤通春会長に引き継がれ、新井勲夫支部長が県連理事長とった為、坂本恵が支部長を引き継ぎ現在に至っている。

県南支部の活躍としては国体では小島常男が選手及び監督として活躍し、関東弓道選手権大会及び全日本弓道選手権大会では池田邦子、小宮栄子、岡田義助、浅野光子の各選手（4氏共現在県央支部所属）が選出され当時の活躍は突出したものがあつた。近年では国体青年女子部門において菅野志保子、荻谷道子、鹿野信恵の各選手が活躍している。

現在支部の行事として行っているのは初射会、選手権大会、優勝杯戦、講習会（4段以下）、研修会（1泊）等である。その他、高校生に対する講習会（2回）、夏、春2回の高校大会、（青少年武道大会予選会）の助成と支援を行っているが、現在、高校弓道においては道場設備が不十分であり、又指導者も不足している状態である。高校弓道発展のために学校当局の理解と協力が必要であり、支部としても公営道場の開放等積極的に働きかけ、応援と協力を行っていきたいと考えている。

支部内の各連盟主催の射会は、蕨市「蕨機まつり射会」、川口市「キューポラ射会」、草加市「東部よみうり新聞社杯弓道大会」、吉川市「武輝神社奉納射会」、越谷市「しらこぼと射会」及び「しらこぼと遠的射会」等があり、各射会に会員の参加を支援する等、支部内の和を図るとともに県連行事には積極的に参加し、益々支部の団結と発展を図るよう努めている。

◇ 県央支部の歴史

県央支部は旧浦和市、大宮市、与野市が平成13年合併することになり、支部の区割りが見直されて、それまで東部支部・県南支部に別れて所属していた上尾市弓道連盟とさいたま市の各弓道会が県央支部となった。

県央支部設立にあたって平成13年5月26日（土）浦和駒場体育館において、発足総会が開催され、規約制定、役員選出及び事業計画の審議が行われ承認された。初代の支部長には岡田義助教士七段が就任し、2期4年勤めた。同年10月7日第1回「支部杯」弓道大会が大宮公園弓道場で開催され、111名の参加を得た。この県央支部杯は県央支部の各道場が2つの異なる支部から別れて構成されたため、各道場及び会員の意識を一つにまとめるため、初代支部長の強い意向により、特別な組み合わせが採用された。それは参加者を道場・称号・段位・男女が異なるように3名ずつ組み合わせた混成チームを造り、団体戦とした。現在でも支部杯はこのような組み合わせが採用されており、このことにより会員相互の理解と親睦が計られて、その後の支部運営に貢献している。

平成15年5月31日さいたま市桜区に記念総合体育館弓道場が完成した。また、同年7月25日には上尾市に新しい県立武道館弓道場が落成しことに伴い、旧浦和市の県庁裏手にあつた旧県立武道館が閉鎖され、武道館弓道会は道場を記念総合体育館弓道場に移し、名称

を彩弓会と改めた。

平成16年8月1日には浦和駒場弓友会が創設30年を迎え、記念大会が開催された。

平成17年岩槻市とさいたま市が合併することになり、再度支部の見直しが行われ岩槻弓道会が県央支部に、上尾市弓道連盟が東部支部へと移った。これにより県央支部はさいたま市一市のみで支部を構成することとなった。この年からは支部長が浅野有三教士七段に代わり、現在2期4年目に入っている。

現在県央支部の下部組織には岩槻弓道会、記念総合体育館彩弓会、駒場弓友会、大宮弓武会、与野弓道会の5団体と6つの道場がある。また、さいたま市内の大学1校、高校22校及び中学2校に伝統ある弓道部があり、それぞれ活躍している。

支部の行事には会員が楽しみにしている射会として①新年初射会、②納射会、③総会射会、④支部杯、⑤市民体育大会、⑥高校生春季大会がある。また、講習会は四段以下4回、五段、称号者がそれぞれ2回及び高校生1回開催している。講師の先生も支部内の指導委員のみならず、広く支部外からも招聘し、会員1人ひとりに応じた知育・徳育・体育の向上に心がけている。高校生の講習会では平成20年280名を越す参加者があり、講師として支部内称号者27名を配置した。その他、県体、武道大会、ねんりんピック予選会、錬成会を開催している。

各弓道会においては初心者のための弓道教室、会員のための研修会及び研修旅行が盛んに行われており、岩槻弓道会では岩槻まつり弓道大会、駒場弓友会では30m遠的大会、与野弓道会では地域の高校生を招いた秋季弓道大会等が毎年行なわれ、他の弓道会にも参加を呼びかけている。また、大宮氷川神社では毎年4月境内仮設弓道場で歴史ある「花鎮め弓道大会」が開催され、平成20年は62回目であった。

◇ 西部支部の歴史

西部支部は、埼玉県南西部に位置し、首都圏近郊都市20キロから30キロ圏内にある。一部に丘陵等があるが全体的には比較的平坦な地形で、平林寺(新座市)の境内林、三富新田(三芳町、所沢市)に代表される雑木林が広がり、現在も武蔵野の面影を色濃く残している。

昭和24年に埼玉弓連が発足し、当西部地区は、当初は「入間川越支部」と称し、西部支部という名称は、現在の県北支部のことであった。昭和31年の埼玉弓連会員名簿によると、当支部は約40名で、川越、東松山が主体で、そのほかは毛呂山、所沢、吾野村であった。

昭和37年から「西部支部」と改称したが、会員数は162名で、そのうち現西部支部を組織する連盟はほとんど立ち上がってはいなかった。

昭和50年代に入り、会員数が増加し大所帯になった為、昭和59年に「西部支部」と「中部支部」の2支部に分割された。

昭和62年には、西部支部は600名を超える支部に成長した。成長の要因としては各道場において初心者弓道教室、射会等を活発に開催し、地域スポーツ愛好者の受入に取り組んだこと、また、県内外から講師を招聘し、各道場の中堅会員、指導者層の育成に尽力したことなどが考えられる。現在も中堅層を対象に、支部による指導者特別研修会や講習会が定期的に持たれ、また、各道場においても初心者教室が実施され、会員の拡大に努めている。

平成 13 年には市町村合併により支部の再編が行なわれ、県央支部が編成され、7 支部となり、現在の西部支部となった。

西部支部の現在の組織は、朝霞市弓道連盟、大井弓道連盟（ふじみ野市）、上福岡弓道連盟（ふじみ野市）、志木市弓道連盟、所沢市弓道連盟、所沢久米弓道会、新座市弓道連盟、富士見市弓道連盟、三芳町弓道連盟、防衛医大弓道部、平成 19 年 4 月には和光市弓道連盟が設立され、8 市町、全てに弓道連盟があり、11 団体が活動している。また高校 5 校の弓道部が夫々活躍し、また弓道スポーツ少年団が全国的にも先駆けて組織され（所沢）、各道場でも少数ではあるが、小中学生が弓道の練習に励んでいる。

西部支部は他支部と比べ一般会員が多く、高校生は少ないという特徴がある。支部行事には毎回多くの参加者があり、にぎわいを見せている。今後も支部全体で弓道の普及と地域スポーツの振興を推し進めて行きたい。

支部の行事としては、[講習会] ①西部支部講習会（四段以下） ②西部支部女子特別講習会 ③西部支部特別研修会 ④西部支部高校生講習会（春季・夏季） ⑤中部・西部指導者特別研修。 [射会] ①西部支部選手権大会 ②西部支部寿射会 ③高校生選手権大会 ④西部支部納射会 ⑤西部支部初射会 ⑥中部西部親善射会 ⑦総会射会 等を行なっている。

◇ 中部支部の生い立ちと特色

24 年前、五つの支部であった埼玉弓連は弓道人口が増え、特に西部支部地域の増加が著しく、昭和 59 年、埼玉弓連の評議員会で旧西部支部から川越を中心とした地域を分け新たに中部支部とし、六つの支部で構成する事となった。初代の中部支部長は鈴木哲郎先生が就任して発足し、以降 16 年間、玉乃内淳先生、内河輝臣先生と支部長が変わる中、支部会員の友好、射技向上等を基軸として活動が図られてきた。

そんな中、埼玉県議会で第 59 回国民体育大会が開催される事となり、若干の経緯があったが弓道競技会場が日高市に決まり、市民及び行政の理解と努力により立派な「日高市文化体育館アリーナ弓道場」が完成した。

当時の松沢岳埼玉弓連会長（現在名誉会長）を始め第 59 回天野錦蔵国体推進運営委員長、現在の小澤通春埼玉弓連会長並びに関係諸先生方のお骨折り、また中部支部の会員の協力によって、平成 15 年 10 月に第 59 回埼玉国体「まごころ国体」が盛大に開催され、成功したことを我が支部としても誇りに思っている。

国体後このアリーナ弓道場は、日高市、中部支部、埼玉弓連の活動基点として、一般、高校、大学等の競技、講習・研修会場に利用されており、更に活用されることを望むところである。

中部支部は地理的に埼玉県の中ほどに位置し、川越市がほぼ中心となる。川越は歴史のある伝統豊かな街、武道の盛んな所である。大河ドラマで一般の方に知られ、観光地としてもまた江戸文化の香りが残る名所である。東武東上線の川越駅を基点とした JR 埼京線、川越線、本川越駅から始まる西武新宿線、メトロ有楽町線等の首都圏につながる鉄道網を擁し、道路網は『国道 16 号、関越道・圏央道等の高速道路』が走る。

西北部には秩父奥武蔵の山並みを望む風光明媚なところであり、秩父山系を源に荒川に注ぐ入間川、高麗川、都幾川、越辺川及び市ノ川の流域には、穀倉地帯が広がる。また、入間

市及び狭山市の温暖な丘陵地帯では、有名な狭山茶のお茶畑の風景が広がり、路地では各野菜の栽培が盛んである。

さらに戦後、工業団地が開発され、入間市、狭山市、川越市、坂戸市、鶴ヶ島市及び東松山市の工業団地では、大企業が進出し国の経済発展、地域の活性化に貢献している。

この企業等の中に、全日本勤労者弓道選手権大会入賞されている企業・団体もあり、(株)ディーゼル機器（現在、(株)ボッシュ）、(株)ホンダ技研埼玉、航空入間基地等を挙げることができる。

中部支部は、他支部に比べ一番広い面積で19市町村を擁する。10の弓道連盟(入間市、越生町、川越市、坂戸市、狭山市、鶴ヶ島市、飯能市、東松山市、日高市及び毛呂山町)、2つの弓道会(小川町及び川島町)、更に?啄道場及び(株)ボッシュ弓道部の計14団体で構成され、一般会員は490名が在籍する。

これに、弓道部のある高校が23校(川越市8校、狭山市4校、入間市3校、坂戸市、日高市、飯能市、越生町、毛呂山町、飯能市、滑川市、東松山町の各1校)、更に弓道部のある大学が7校(東洋大工学部、埼玉医科大学、明海大学、駿河台大学、大東文化大学、女子栄養大学、城西大学)が加わる。

中部支部は今でも西部支部とは親善射会、研修会等を共同して開催するなどし、兄弟の様にお互いに交流を図っている。

5 編集後記

予てよりホームページに埼玉県弓道連盟の歴史・成り立ちなどを紹介して欲しいとの要望がなされていました。総務委員会ではこれを受けて埼玉県弓道連盟創立50周年記念誌から抜粋、補稿を重ね編纂しましたので掲載をします。

県下7支部の紹介については逐次掲載すると共に、写真等の掲載も試みて行き、新しい発見ができたらと考えています。

創立50周年記念誌からの抜粋の原案については片居木榮一先生に、補稿と編纂は立川洪介先生に多大なご苦勞をおかけしました。掲載に際し心よりお礼申し上げます。